

「令和4年度(2022年度)の学校教育自己診断の結果・分析」

— 大阪府立福井高等学校 —

(1) 全般

生徒・保護者ともに、多くのアンケート項目で数値が向上した。コロナ禍が収束しつつあることが追い風となっていることも間違いはないが、前年比で生徒:29項目中20項目がプラス、保護者23項目中では16項目でプラスは好結果と判断する。

コロナ禍中で温めた多文化で地元密着でもある「ちいさな総合学科」高校への応援をいただいたと前向きにとらえ感謝し、学校としてますます努力したい。

(2) キャリア教育の推進—「夢から発見」—

「ドリカム授業」を中心にしてコロナ禍中でも視野を外に広げることを工夫した。1人1台端末も積極的に活用して、ポジティブに生きる生き方を考えていった。本校の生徒も所属する車イスバスケットボールのチームにも来ていただき、全国レベルの選手のお話も伺うなどした。また「ドリカムフェスタ」に近隣中学校の教員に来ていただき、生徒たちが成長している様子を生徒たちに向けてお伝えいただいた。

閉塞感もあるコロナ禍中ではあったが、障がいがあってもポジティブな生き方をされる方とふれあい、また自分たちも成長していることを中学の教員から評価していただいたことなどで、生徒たち自身もその成長を感じ将来に向かって前向きになったことと思われる。

結果、自己診断アンケートや総合学科アンケートでは、進路・生き方についての肯定的回答が89%に達し、当年中の成果に対する福井高校賞も221件の多きとなった。

生徒たちが、コロナ禍中に埋没することなく前向きに将来を拓き進もうとしている様子が見られていると判断する。

(3) 確かな学力の定着—「発見から実現」—

規模の小さい本校は「ちいさな総合学科」をポジティブに意識している。地元生徒の比率が高いことと、主に地元以外からの外国由縁の生徒が10%以上在籍することを「強み」とし、両者の違いも生かしての選択授業やドリカム授業の満足度が高かった様子。総合学科アンケートでの総合学科で学んで良かったとする回答:95%、他の学校にない特徴の回答:83%。

但し、授業に関しては、教員の工夫を認める:79%に対して授業がわかりやすいは72%。他校にはない取組みを進めていることもあり、特徴・工夫とわかりやすさの両立には、今後とも努力が必要と判断される。所謂偏差値では見通せない方面の進路も含めて、特徴ある「ちいさな総合学科」を、授業もさらにわかりやすくしながら発展させたい。

(4) 安全で安心な学びの場づくり

生徒の数字では、生徒の意見を聞く:79%(+6%)、悩みや相談に親身81%(+7%)、いじめ対応80%(+3%)と基盤と見るべき数字はいずれも向上しているが、担任以外に気軽に相談は

69%(+6%)と伸びたもののまだ7割に届かない。一方保護者の数字を見ると、子どもを理解78%(-4%)、保護者の相談85%(-3%)、いじめ対応76%(-6%)とこちらは下がっている。生徒向上と保護者低下、担任と担任以外。この数字の相違は、担任の対応力・対応数は向上し、生徒全般には良い効果・反応を生んでいるが、担任が気づいていないところ、あるいは担任の対応力を超えた状況において、生徒が学校には困りごとを伝えられず、家庭で保護者に訴えていることなどを想定するべきだろう。また働き方改革へのご協力をお願いして、教員の時間外での保護者対応を減らせていただいていることの影響もあるかもしれない。

いずれにしても、担任個人での対応力・対応時間には限度があるので、校内の担任以外のより一層の寄添いや、外部人材・組織との連携を強めて、生徒・保護者の安全・安心を高めていきたい。また保護者の数字では、教育方針や教育情報の提供について88%(-5%)が気になるが、生徒指導の方針(+8%)、将来の進路・職業(+8%)、進路にかかる家庭連絡(+1%)などその内容にかかる数字は向上している。生徒経由で、あるいは保護者向けの一斉メールで、情報は伝わっており、一定の納得感もいただいているのだが、ここでも時間外での面談や電話連絡を減らせていただいていることの影響を感じる。学校からのお話は伝わっているが、保護者からのお話を十分に聴けていない表れとも推定する。

(5) 多文化共生・地域連携・保幼小中高大連携

多文化・国際・外国という言葉を含む質問では、生徒・保護者ともすべて80%以上の肯定値で、昨年比でも±0~5%の向上が見られる。日本語指導の特別枠がある高校であること、そしてそれが他の生徒の学びの向上にもつながっていることが、より好感度で認められていると推定する。

地域や他の学校等との交流についても、生徒75%(+14%)、保護者85%(+5%)と大きく伸びた。まだコロナ禍中とはいえ、コロナ禍にかかる制限が緩和され、行事や交流を再開しつつあるので当然の結果でもあるが、まだまだ制約もあるなかでも「ようやくできる！」と喜ぶ生徒の顔が映った数字である。

地域の校園等との交流の再開は、地元にも歓迎されている。多文化と地元連携の連携も進んでおり、今後、本校の特徴として柱にもしていきたい。

(6) まとめ

コロナ禍の制約が解かれることを良き追い風にして、またコロナ禍中に整えられた1人1台端末や種々のICT環境の有効活用を通して、現状の方向性をさらに発展させる形で、地元：茨木(特に北部)と箕面・高槻の隣接部から自転車通学してくる生徒と、大阪市内等、遠方からの日本語指導生徒を大きな構成員としつつ、それに加えて交通不便地にあるにも関わらず多方面から(淀川対岸からの生徒もいる)本校を選んでくださっている状況をさらに発展させて、いろいろな生徒が相互に認め合いながら学ぶ「ちいさな総合学科」の福井高校を大事にしたい。

令和5年3月31日 校長